

# epoca

vol.118 2016.2

エポカ



特集

ジェンダーとスポーツ

## 男のスポーツ、女のスポーツってあり??

日本のシンクロナイズドスイミングの世界に男性選手が現れるようになった。また、サッカー女子日本代表「なでしこ」や7人制ラグビー女子日本代表「サクラセブンズ」などの活躍が目覚ましい。彼・彼女たちを見ていると、新しい男性・女性の生き方の可能性を広げていると感じる。かつては男性あるいは女性しか参加できなかったスポーツに果敢に進出している彼らは、各種目の試合で戦っている以外にも、“ジェンダー”という相手に挑んでいるという自覚があるのだろうか？ 男性・女性はこうあるべき、男性だから、女性だからこれをしてはいけないという概念が、彼らにはそもそもなさそうなのが羨ましい。自身の身体の可能性に真摯に向き合い、その面白さ、喜びの神髄を知る彼らだからこそ、性差による種目の固定や不平等な扱いなどジェンダーのしがらみから解放されているのだろう。

## スポーツにおけるジェンダーからの解放は近い??

スポーツにおける男女の身体能力の違いを優劣で判断するのは、ジェンダーバイアスだろう。筋肉量の多い男性に有利な種目が多くある一方で、シンクロナイズドスイミングでは、女性と比べ体脂肪の少ない男性は水に浮きにくく、シンクロに必要な動きやスタミナ面で不利だという。様々なスポーツ種目があり、それぞれ必要とされる身体能力も違う。優劣ではなく男女の体の違いと能力を認め、性差ではなく個人が持つ身体能力の特徴に根差したスポーツ文化を目指したい。

体を動かし、頭脳を働かせることを純粋に楽しむことが、私たちがスポーツをする原点。スポーツに興じる自由は平等なはず。(M)

## この人に聞く！ 山中 未久さん (立命館大学4回生 相撲部 / 焼津市出身)

去年8月、大阪で開催された世界相撲選手権大会。女子軽量級で日本代表として出場した山中未久さんは、準決勝でロシアの選手に敗れ3位となった。その時の悔しさが今でも忘れられない。

山中さんが相撲を始めたのは4歳の時。同じ保育園児の自分より体の大きい子や男の子相手に勝利した時、相撲を取る楽しさ、喜びを知った。その後、小学4年生の時、地元焼津市の相撲クラブで本格的に相撲を習い始める。静岡商業高校に進み、高校相撲部に女子として初めて入部、高校2年生の時、全日本女子相撲選手権大会で初優勝。その後も優勝を重ね、全日本ではこれまで計4回優勝している。現在は立命館大学相撲部に所属。大学相撲部には今、山中さんを含め4人の女子部員がいるが、山中さんが入部した時は、唯一かつ初めての女子部員だった。

相撲クラブや高校・大学相撲部に女子として初めて入ることや、そこで唯一の女子として男子達と稽古することに対して特に違和感はなかった。小さな頃に相撲と出あい、男子と相撲を取ることが自然なこととして身についたためだと考えている。両親も山中さんが相撲をやることに協力的だった。

それでも、これまで相撲を続けてきて、女子が相撲をすることに対して馬鹿にした扱いを受けたこともあり、相撲をやめておけばよかったと思う時期もあった。しかしそれは、自分が相撲をやることに恥ずかしさを感じて人の目を気にしていたからだ気づいてから、意識が変わった。そういった時期に、全日本で優勝するなど結果もついてきた。

今は、相撲をやっていることに対して自信と誇りを持ち、相撲を続けてきて本当に良かったと感じている。女子が相撲をやることに対していろいろな意見があるが、どんな意見も気にならなくなった。最近は、女子として相撲をやってきたからこそ出あえた環境や立場があると感じている。

いつか相撲がオリンピック競技となり、出場できることに夢をはせる。相撲の聖地、両国国技館で女性が土俵に上られるようになってほしいとも願う。

女子相撲は、世界的に競技人口も増えつつあり、レベルも上がってきている。これからは、女子相撲が継続・発展していけるような道を作ることが使命だとも感じている。大学卒業後は、大学相撲部のコーチとして後輩女子相撲部員の育成に携わる一方、選手としても自身の相撲を極める。

山中さんの相撲の持ち味は、立ち合いの鋭さとそこからのスピード勝負だ。憧れの力士は日馬富士。日馬富士の立ち合いの鋭さとそこからの攻め方を目標としている。小学5年生の時、日馬富士関のいる相撲部屋に稽古見学に行き、他の力士と比べて体格が恵まれていないにもかかわらず対等に戦う姿を見てからずっと憧れだ。

目指すは、今年モンゴルで開催される世界相撲選手権大会で優勝すること。去年の雪辱を果たしたい。



●地域にしっかり根付く事業所として

磐田市を拠点とする「サンサンいわた」は、障害者就労継続支援（B型）事業を始め、障害者相談支援事業、障害児通所支援事業などを通し、障がいのある人が就労を通じて社会人として基本的な生活習慣を身に付けたり、人とのつながりや生きがいを見出すことを目的に活動しています。

「私たちの事業所の強みは、磐田市内に拠点が7か所あり、それぞれの地域と密接に連携していることです。そして、障がいの特性を職員だけでなく、地域の人にも理解していただくことで、障がいのある人もない人も誰もが住みやすい社会を目指しています」と施設長の三輪浜子さんは語ります。喫茶店の運営を始め、パンの製造販売、缶バッチの製造、縫製作業、農園収穫作業など、携わる仕事は多岐にわたります。そして、それぞれの障がいの特性や本人の希望に沿った作業メニューが組まれています。

●職員のワーク・ライフ・バランスを守るために

職員は事業所全体で約40人、ほとんどが女性職員です。育児休業や復職後の育児短時間勤務など、職員が各自のライフサイクルに合わせた働き方ができるよう、また、子どもが突然熱を出し急に早退をするなどの個々の職員の状況にも柔軟に対応できる職場環境を整備しています。一方で、複数の職員の育休や育短が長期にわたることで、逆に他の職員への負担が増えてしまうという課題や、様々な研修やレクリエーション活動を積極的に行えば行うほど、職員の負担や配置上の課題が多くなり、利用者の充実度と職員の働き方のバランスをとることも難しいとのこと。

「利用者、職員、地域それぞれいろいろな考え方がある中で、時間をかけてすり合わせをしてきた過程の上に今があります。現在私が握っているバトンを、次の世代にしっかりと渡すために、できる限りのことはしたいと思います。基本は人づくり。組織の理念や利用者の支援を理解する職員をしっかりと育成し、ケアすることが大切です。そして、困難な時や運営に迷った時に立ち戻るのが、私たちの基本理念・方針です。“私たちはいったい何のために誰のためにこの仕事をしているのだろうか？”ということのを全職員が忘れないことです。そういったことが結果として、職員を始め、利用者やその家族すべての人のワーク・ライフ・バランスに繋がっているのではないかと考えます」と三輪さんは話しました。



みんな一生懸命作業しています



施設長の三輪浜子さん

ワーク・ライフ・バランスの実現に向けて、みんなで話し合おう！  
平成27年度男女共同参画社会づくり宣言事業所・団体  
「事例発表・情報交換会・タウンミーティング」  
～参加者・事業所・団体募集～

ワーク・ライフ・バランスを実践する事業所や団体の取組事例を聞き、意見交換を行うことで、女性の能力発揮や参画拡大、ワーク・ライフ・バランスの効果的な取組の輪を広げていきましょう！

互いのネットワークを構築し、また、タウンミーティングに参加してみて、みなさんがお住まいの地域の実情や課題をお聞かせください！

【日時】平成28年2月18日（木）13:30～16:30（13:00～受付）

【会場】清水町地域交流センター（駿東郡清水町堂庭6番地の1）

【内容】(1)宣言事業所事例発表

①株式会社 昭和自動車学校（富士市）

②株式会社 木村鋳造所（清水町）

(2)情報交換会

(3)タウンミーティング（ワーク・ライフ・バランスの実現に向けて）

【参加申込】氏名、所属事業所・団体名、住所、電話番号を明記の上、FAX、Eメールまたは電話にて県男女共同参画課あてにお申込みください。

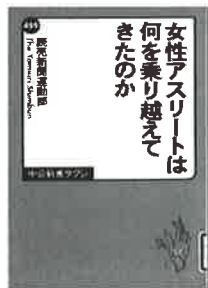
【申込締切】2月10日（水）まで

【申込・問合せ先】

静岡県暮らし・環境部県民生活局男女共同参画課  
〒420-8601 静岡市葵区追手町9-6  
TEL：054-221-2824 FAX：054-221-2941  
Eメール：danjyo@pref.shizuoka.lg.jp

『女性アスリートは何を乗り越えてきたのか』

読売新聞運動部 // 著  
中央公論新社 2013年



本書は読売新聞の女性とスポーツをテーマにした連載「WOMEN」をまとめたもの。生理、妊娠・出産、婦人科系の病気、指導者からの暴力など、これまであまり知られてこなかった、女性アスリートの真実を知ることができます。

『なでしこキャプテン!』

夢は見るものではなく、かなえるもの

澤穂希 // 作 早草紀子 // 写真  
集英社 2012年



2011年、ドイツワールドカップで「なでしこ」を世界一に導いた澤穂希選手。「いつか、ワールドカップで優勝したい」という大きな夢をどうやって叶えたのでしょうか。彼女自身がこれまでの道のりを振り返り、夢の叶え方を語ります。

『蹴りたがる女子』

高崎計三 // 著 杉博文 // 写真  
実業之日本社 2015年



女子格闘技家として世界で活躍する現役選手7人と引退選手1人にインタビューし、写真とともに紹介しています。来歴や考え方、キャリアを重ねるうえで何を犠牲にしてきたかなど、彼女たちの素顔に迫る1冊です。



図書室利用案内

貸出：図書5冊、ビデオ・DVD2本（2週間）  
開室時間：月～金 9:00～18:00 土日祝 9:00～17:00  
休室日：第1・3・5日曜日、年末年始、図書整理日（2/1～2/9、3/31）  
TEL：054-255-8763 / FAX：054-255-8759

地元のハンサムウーマン③

～地域力を高める女性たち～

勝又 瞳さん（ながいずみ親コミュニティ・なごみカフェ会長 / 長泉町）



勝又瞳さん

◆地域の子育てを応援！

長泉町にある『なごみカフェ』は、長泉町および近隣地域で子育てをする親たちが集い、交流しあえるサロンを中心とした活動をしています。サロンはCO-OPのコミュニティールームを借りて、月2回、10～14時の間に開かれており、入退場自由となっています。参加者は子どもを遊ばせながらおしゃべり、編み物、ソーイング等それぞれのやりたいことをして過ごします。また、スタッフと参加者でカレーや豚汁など簡単な昼食を作り、会話を楽しみながら食事ができる場にもなっています。

会長の勝又瞳さんは、管理栄養士としてフルタイムで仕事を持ち、保育園に通う3歳になる男の子の母親です。仕事があるため、活動を他のスタッフに任せることが多いのですが、サロンに参加した時は、行政の子育て支援制度の動きについて、他のスタッフや参加者たちと盛り上がることも多いとのこと。

「なごみカフェを作ったきっかけは、育休が終わり息子を保育園に入れようと思った時に、入れなかったこと。行政の制度や現状についてオープンになっている情報はわずかで、知りたい情報を安易に得られないことがわかりました。そんな時情報をくれたのは同じ経験をしたママ友でした。流入の多い長泉町では同年代の子どもを持つ知り合いがいらない方もいるため、親たちが気軽に集まって様々な情報を交換できる場が必要であると感じました。スタッフは子育て真っ最中ながら、熱意とホスピタリティを持った方ばかり。みんなの力で地域の親たちの生の声を行政に届けられるように活動を継続させていきたい」と語ります。

『なごみフェス!』と称して、町内の各幼稚園有志のグループによるハンドメイド品の販売、地域の子育てサークルの出展、町内の飲食店のケータリング販売等をするマルシェを主催します。第2回を今年2月に開催し、入園前に必要な情報を提供するのと共に、幼稚園児を持つ親たちにとっても結束を高める場となることを期待しつつ、地域で子育てできることを目指しています。

取材：長島はるみ（NPO法人 あざれあ交流会議理事）



なごみカフェで子育てについて情報交換

あざれあ相談

悩んだとき、困ったときには「あざれあ」へ

〈女性相談〉

すべて女性の相談員、医師、弁護士による相談です。安心してお電話ください。

0558-23-7879 賀茂

055-925-7879 東部

054-272-7879 中部

053-456-7879 西部

※混み合う場合がございます。

時間をあけておかけ直してください。

月・火・木・金 9:00～16:00

水曜日 14:00～20:00

第2土曜日 13:00～18:00

※いずれも日・祝を除く

面接

要予約・託児つき・無料  
あざれあ女性電話相談の番号におかけください。

月	火	水	木	金
DV・その他暴力	偶数月第4 精神科医相談	DV・その他暴力	DV・その他暴力	奇数月第3 精神科医相談
10:00～15:00	14:00～16:00	14:00～19:00	10:00～15:00	14:00～16:00
	第1・第3 弁護士相談 (離婚・相続等)			
	13:00～16:00			

〈男性電話相談〉

生き方・家庭・仕事・健康等の悩み  
男性相談員が対応します。

054-272-7880

毎月第1・3土曜日 13:00～17:00

〈チャレンジ相談〉

「再就職したい」「起業したい」  
「NPOを作りたい」等

予約：054-221-2824

完全予約制 女性限定

託児つき（無料）

偶数月第3土曜日実施：

①13:00～ ②14:00～ ③15:00～

奇数月第3水曜日実施：

①9:30～ ②10:30～ ③11:30～